Bulletin of Aichi Univ. of Education, 73（Educational Sciences）, pp. 45 − 53, March, 2024

ハビトゥスの変容としての人間形成？
―人間形成の社会的・言説的条件をめぐる一考察―

野平 慎二

学校教育講座（教育学）

Bildung as Transformation of Habitus? On Social and Discoursive Conditions of *Bildung*

Shinji NOBIRA

Department of School Education (Pedagogy), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

本論文の目的は，現代ドイツ教育哲学のひとつの潮流である人間形成論的に方向づけられたビオグラフィ研究（bildungstheoretisch orientierte Biographieforschung. 以下BOBと略記。）において提示されている，ハビトゥスの変容としての人間形成概念の意義と課題について検討することである。

周知のとおり，ハビトゥスはフランスの社会学者ピエール・ブルデューによって提起された概念である。ハビトゥスは，社会化の過程を通じて獲得され，身体化された，持続的な心的諸傾向のシステムであり，「構造化された構造」としての性格をもつ。同時にハビトゥスは，社会的実践を産出する原理でもあり，「構造化する構造」としても機能する（Bourdieu 1980 : 88 = 1988 : 83）。ブルデューはこの概念を用いて，社会学研究における主観主義と客観主義の二元論の克服や，人々の社会的行為にかかわる構造と実践のダイナミックな相互作用の描出を試みた。

ひるがえって，BOBもまた，ヴィルヘルム・フォン・フンボルトやヘーゲルに代表される古典的な人間形成論を踏襲する形で，人間形成を自己と世界との相互作用の出来事と捉える。そして，インタビュイーにこれまでの半生を自由に語ってもらうビオグラフィ・インタビューの分析を通して，自己と世界との相互作用としての人間形成の様相を再構成し，人間形成の理論と経験的現実を架橋することを試みる。もっとも，BOBのアプローチに対しては，人間形成の出来事がもっぱら自己アイデンティティの形成の次元において捉えられており，人間形成に関わる社会的・言説的条件（gesellschaftliche und diskursive Bedingungen）が十分に解明されていないという異論が向けられている（Cf. Wigger 2004）。「世界の忘却（Weltvergessenheit）」（Cf. Rosenberg 2010）と呼ばれるこの異論に対する対応として，BOBを主導する研究者のひとりH.-Chr.コラーは，インタビュー分析に社会理論的なアプローチを組み込むことを提案している。そして，ハビトゥスの概念の援用はこの対応にとって有力な手がかりのひとつと考えられている（Koller 2016 : 179）。

以下ではまず，ブルデューにおけるハビトゥスの概念，ならびにブルデューが手がけたライフヒストリー研究について確認する（1）。続いて，BOBにおけるハビトゥス概念の受容の様子を，ローゼンベルクとヴィガーのアプローチにそくしながら概観し（2），そこにどのような特徴や問題点が見られるかを検討する（3）。それを踏まえて，BOBにおけるハビトゥスの変容としての人間形成概念の意義と課題について考察する。

1．ブルデューにおけるハビトゥスとライフヒストリー研究

（1）ハビトゥスの概念

最初に，ハビトゥスの概念を再確認しておきたい。社会化の過程において，個々人は，社会集団の一員としてふさわしい実践の仕方を習得する。そこでは，外面に表れた個別の身体的振る舞いのみならず，その振る舞いの背後にある，実践の産出原理も習得される。個々人がそのつど新たに遂行する実践は個別的，一回的なものであるにもかかわらず，それらに一定の傾向性を認めることができるのは，この原理に従って実践が生み出されるためである。この原理はまた，社会的に構造化された原理でもあり，そのため社会集団の構成員は，この原理にもとづいて産み出された実践を，ふさわしいものとして認知する。この社会的に構造化

された，実践に傾向性を付与する原理がハビトゥスと呼ばれるものである。この意味で，ハビトゥスは実践を方向づける働きをもつ。他方，ハビトゥスは個々の実践から離れたところに存在しているわけではなく，実践を通して維持されるものでもある。この意味で，ハビトゥスは実践によって規定されるという性格をもつ[1)]。

ハビトゥス論にはしばしば決定論や宿命論といった批判が向けられるが[2)]，ブルデューによればハビトゥスは個人やその実践を一方的に規定するものではなく，新たな状況や経験との関連のなかで絶えず変化するものでもある（Cf. Bourdieu 1997 : 191 = 2009 : 273）。ハビトゥスの変容については，二つのあり方が考えられる。ひとつは個人のなかでのハビトゥスの変容であり，もうひとつはある社会集団のハビトゥスの変容である。前者は，ある集団のハビトゥスを習得した個人が，後に別の集団に属することで，それまでのハビトゥスを捨て去り，新しいハビトゥスを習得するという事態である。その際，慣習化したハビトゥスを捨て去ることは容易ではなく，新しいハビトゥスを習得することは，個人にとってはある種の危機として経験される。「危機の状況あるいは激烈な変化の状況では，（中略）行為者たちは異なる状況あるいは異なる段階と結びついた性向を共有することに苦労することが多い」（Bourdieu 1997 : 191 = 2009 : 273）。自らの実践と集団からの期待との間にずれが生じる時，「即時・無媒介的適応の関係は中断される。そのためらいの瞬間に，反省の一形態が入り込む」（Bourdieu 1997 : 191f. = 2009 : 274）。その反省を通して，新しいハビトゥスが個人のなかに確立されていく。また，後者の，社会集団レベルでのハビトゥスの変容は，ある集団の構成員が時間の経過にしたがって入れ替わり，それとともにその集団のハビトゥスが変容していく事態を指す。たとえばブルデューは，高等教育の大衆化と学歴資格の価値の下落にともなって，高等教育機関という場において共有されるハビトゥスが変容してきたことを指摘している（Bourdieu 1979 : 147ff. = 2020 : 217ff.; Bourdieu 1997 : 191 = 2009 : 274）。ひとつの社会集団に入る者はその集団のハビトゥスを習得し，それにもとづいて実践を生み出すのだが，「ハビトゥスの実践的戦略に委ねられる遊びあるいは解釈の余地を不可避的に残さないような規則はない」（Bourdieu 1997 : 192 = 2009 : 275）ために，実践が構造を変容させることもありうるのである。もっとも，この後者の意味でのハビトゥスの変容には，通常かなりの時間を要する。それゆえ，ハビトゥスのもつ決定論的性格が前面に出てくることは致し方ないと言えるが，ハビトゥスは構造と実践の相互規定的なあり方を表す概念でもある点に注意を向けておくことは重要であろう。

(2)「伝記的幻想」

ライフヒストリー研究に関して，ブルデューは「伝記的幻想」（Bourdieu 1986 = 2005）という小論を著している。その内容についてここで瞥見しておきたい。

その小論のなかでブルデューはまず，生の語りには「首尾一貫し方向性を持った総体」や「クロノロジカルな秩序」といった特徴が見られることを挙げ（Bourdieu 1986 : 69 = 2005 : 11f.），生の語りに対して意味解釈を行い，「一貫性と一定性」（Bourdieu 1986 : 69 = 2005 : 12）のある論理を導き出すことがライフヒストリー研究の課題とされていることを指摘する。

他方でブルデューは，ライフヒストリーに一貫性を求めることは「レトリックの幻想」（Bourdieu 1986 : 70 = 2005 : 12）であるとする認識も示している。ライフヒストリーを一貫したものと捉える前提は，たとえば近代小説に特徴的であるが，それはあくまで歴史的，偶然的な捉え方であり，それとは異なる生の描き方もありうる。ブルデューによれば，社会的過程の批判的分析を行う場合には，伝記的出来事を「社会空間における，つまりより正確には，関連した場で問題となっているさまざまな種類の資本分配構造の，異なる継起的状態における，配置と移動のようなもの」（Bourdieu 1986 : 71 = 2005 : 15）と捉える視点が必要である。そして，個人のアイデンティティをひとつの構築物として浮かび上がらせる社会的な構造を把握することの必要性を指摘してこの小論は結ばれている。

小林多寿子（2005）によれば，この小論におけるブルデューの主張と英米圏のライフストーリー研究におけるその受け止めとの間にはひとつの「ずれ」が存在した。すなわち，ブルデューはこの小論のなかで伝記的一貫性が幻想であることを指摘したが，ライフストーリー研究においてはライフストーリーの構築性は自明の前提とされており，ライフストーリーの一貫性が幻想かリアリティかではなく，いかなるイデオロギーがそれに一貫性を与えるのか，という問いこそ解明されるべきものである。けれどもブルデュー自身はその後，「社会空間における資本分配構造との関連で伝記的出来事をみる視点」（小林 2005 : 26）へと研究の方向性を移し，伝記的イデオロギーの解明には向かわなかった。

ブルデューは「伝記論をその後この短い指摘以上に展開しなかった」（小林 2005 : 17）ため，ブルデューの思考におけるこの小論の意義を捉えることは難しい。もっとも，見方を変えるならば，個人のアイデンティティをまとまりあるものとして構築する社会的な構造を資本分配との関連で浮かび上がらせるブルデューの一連の研究は，ある意味で伝記的イデオロギーの解明に通じる性格をもつとも考えられる。ライフストーリー研究によってであれ，資本分配構造の解明を通してであれ，主体を構成する構造的条件を問う

ことは，重要な社会学的，哲学的課題であると言えるだろう。

(3)『世界の悲惨』

ブルデューと彼のチームによる，ライフヒストリー・インタビューを用いた社会調査として特筆されるべきは，『世界の悲惨』（Bourdieu et. al. 1993 = 2019-2020）である。五二の聞き取り調査の記録とその社会学的分析からなる，九百ページにも及ぶ大部の書物でありながら，全世界で十万部を超えるベストセラーとなったものである。

『世界の悲惨』は，さまざまな境遇の人々の悩みや苦しみの語りを収めているが，しかしそれはたんに共感をもって読まれるべきインタビューの集成ではなく，科学的な社会調査である。ブルデューによる調査研究の方法論の特徴は，社会学的な客観主義と主観主義の双方を排し，「反射的な反省性」（Bourdieu et. al. 1993 : 1391 = 2020b : 1394）を組み込んでいる点にある。ブルデューによれば，研究者の認識関心といえども決して中立的ではなく，社会調査のなかで事象を客観的に説明できると考えることはできない。たとえばインタビュー調査の場面では，聞き手（研究者）と話し手との間に存在する力関係が，話し手の内容に影響を与えることがしばしばある。そのため『世界の悲惨』においては，「聞き取り調査の関係を介して行使される可能性のある象徴暴力を可能な限り小さくする」（Bourdieu et. al. 1993 : 1393 = 2020b : 1396）ことが課題とされた。その一方で，調査場面に作用する力を自覚し反省した上で，事象を主観的に理解すれば十分であるわけではない。ブルデューによれば，社会調査ないしは社会分析における理解において重要なことは，「被調査者を産出した社会的諸条件の（理論的あるいは実践的な）把握に基づいて，被調査者のあり方の総称的かつ発生的な理解を得ようとすることである」（Bourdieu et. al. 1993 : 1400 = 2020b : 1402）。被調査者個人の性向のみならず，それを方向づける社会的諸条件も同時に解明されなければならない。ブルデューの共同研究者であるP.シャンパーニュは，『世界の悲惨』で採られた反省的なインタビューという方法論の意義について次のように述べている。「漠たる不満・不安のなかにいる人物に掘り下げて繰り返し問うことのおかげで，もっとも個別で特殊なもののうちにもっとも一般的なものを発見し，その起源が彼個人の内にではなく，まさしく彼のおかれている場に属す客観的な矛盾のうちにあることを見いださせるような仕方で，矛盾や内面の葛藤を明るみに出させるために，深部の性向の出現（中略）を容易にすることが重要なのである」（シャンパーニュ 1997 : 92f.）。このような方法論的態度で臨むことによって，個人の実践と社会的な構造とのダイナミックな相互関係を適切に把握することが可能となる。

2. BOBにおけるハビトゥスの変容と人間形成

以上のようなブルデューの社会学的知見は，「はじめに」でも触れたように，人間形成に関わる社会的・言説的条件を把握する上での有力なアプローチとしてBOBに受容されている。本節ではその受容の様子を，BOBを代表する二人の研究者，F. v. ローゼンベルク（Florian von Rosenberg）とL. ヴィガー（Lothar Wigger）の研究に即して検討していきたい。

(1) ローゼンベルク

ローゼンベルクは，人間形成概念の再構成にとってハビトゥスの概念が有益である理由として，以下の3点を挙げる。まず，ハビトゥスは人間形成と同様に過程としての性格を備えていること。ハビトゥスは個人の実践を方向づける原理であるのみならず，個人の実践を通してハビトゥスもまた変容していく。「実践を反復するよう強制するハビトゥスのなかには，再生産への強制のみならず，変容の潜在的な可能性も見て取れるのである」（Rosenberg 2010 : 574）。第二に，既習のハビトゥスと新しい環境や状況との不整合が人間形成の端緒となりうること。BOBにおいては，これまでの世界把握の枠組みでは対処できない状況に直面するという危機の経験が人間形成の端緒となる，と考えられている（Cf. Koller 2012）。ハビトゥスについても同様であり，「ハビトゥスは，新たな界やミリューと接続するなかで新たな実践と接触し，その実践は時間とともにハビトゥスの作動の仕方を持続的に変化させ変容させることができる」（Rosenberg 2010 : 575）。第三に，ハビトゥスの多元性が人間形成の端緒となりうること。ひとりの個人は，意図的か否かにかかわらず同時に複数の社会集団（たとえば，居住する国や地域，民族，階級，職業，世代，ジェンダー，趣味や嗜好等々）に所属し，複数のハビトゥスを体得するが，「多元的に構造化されたハビトゥスは必ずしも調和的であるわけではなく，相互に対立的で分裂した仕方で構造化されている場合もある。この意味で，ハビトゥスはひとつの作動の仕方にではなく複数の重なり合う作動の仕方に従うのであり，それらが相互に矛盾することもありうる」（Rosenberg 2010 : 576）。そしてこの矛盾が危機の経験となり，人間形成の端緒となる可能性をもつのである。

ハビトゥスの概念の人間形成論的意義をこのように指摘した上で，ローゼンベルクはビオグラフィ・インタビューの分析を通して，ハビトゥスの変容としての人間形成過程が5つの段階を経て進行することを示している。すなわち，①それまでの生活環境に違和感を抱き，新しい生活を模索する第1段階，②それまでに

習得されたハビトゥスと新しい生活環境との間に不整合が生じ，生活史上の危機に直面する第2段階，③新しい自己解釈を模索する第3段階，④それまでの生活史に対して批判的，反省的に距離を取る第4段階，⑤新しい自己関係と世界関係が生じ，新しいハビトゥスを獲得する第5段階，という5つの段階である。以下では，ヤン・ボッシュとクリスティアーネ・オトマー（いずれも仮名）の半生と，その分析を通した人間形成過程の再構成の事例を見ておこう（Rosenberg 2010 : 243ff., 264ff.）。

①ヤン・ボッシュの事例

ヤン・ボッシュ（男性）はインタビュー時点で60歳，シュトゥットガルトで心理療法士として働いている。ボッシュの父親は工場経営者，母親は専業主婦であった。ボッシュが12歳の時に両親が離婚，ボッシュは母親と一緒に暮らす。その後母親はうつ病になり，ボッシュは，自分が母親を支えなければならないと考えた。また，ボッシュは，幼少期から母親の影響でカトリック教会と深い関わりをもっており，教会の博愛精神にもとづき，社会的弱者を助けなければならないという強い思いを抱いていた。けれども次第に，なぜキリスト教徒は救われ他の人は救われないのか，という問いに教会が満足な答えを示せないことに失望を感じるようになり，最終的に18歳の時に教会から離れ，労働者のために生きたいと思い始める。高校卒業後，ボッシュは父親のもとで暮らし始め，父親の仕事仲間とも接するようになる。人生にとって重要な問いについて考えたいとの思いから，大学では心理学を専攻する。大学卒業後は，恵まれない家庭の子どもを対象とする心理ケアサービスの団体で働きながら，左翼政党の一員としても活動した。もっとも，いずれの活動も内面的な疎外感を満たすものではなく，一時期，ドラッグやセックスやロックに溺れるヒッピーのような生活を送った。30歳を過ぎた頃，政党内部の路線対立をきっかけに政党活動から離れる。疎外感や喪失感のなかでボッシュはうつ病を患うが，カルロス・カスタネダやユングの著書を読むことで精神の安定を保つ。そして，シュトゥットガルトのユング研究所で心理療法を学ぶことを決意する。ユング研究所には10年間，籍を置くことになる。その間，東洋の哲学やインドの神秘主義を学べたことには満足できたものの，霊的体験，スピリチュアリティ，シャーマニズムによる癒しなどへの関心は否定され，結果的にボッシュは心理療法士の資格を取得した後，ユング研究所を去る。その後，南米に旅行し，帰国後は現在まで，心理療法士として，西洋の心理療法とシャーマニズムによる癒しを融合させた療法活動を行っている。

ローゼンベルクによれば（Rosenberg 2010 : 279ff.），幼少期から青年期に至るまでのボッシュの人生は，生の実存的な意味の探求と，正義感にもとづく他者へのコミットメントという二つの実践の論理によって特徴づけられる。カトリックの信仰にはこの二つの論理がともに表れており，うつ病になった母親を支えようとする責任感は後者の論理の表れと解釈できる。けれども，次第にキリスト教の教えに含まれる正義に対して違和感を抱くようになり，教会という社会空間から離れ，労働者階級という新しい社会空間に関心をもち始める（第1段階）。大学で心理学を専攻したことは生の実存的な意味の探求という論理の表れであり，大学卒業後に心理ケアサービスの団体で働いたことや左翼政党の一員として活動したことには，正義感にもとづく他者へのコミットメントという実践の論理を見て取ることができる。もっとも，心理ケアサービスの団体や政党での活動は実存的な意味の探求の論理を満たすものではないことが明らかになり，ボッシュはこの二つの社会空間から離れ，ヒッピーのような不安定な生活に入り，うつ病も患った。このことは，生の実存的な意味を追求する論理の表れの一形態でもあるが，生活史上の危機に陥ることでもあった（第2段階）。ボッシュはこの危機のなかでカスタネダやユングの著作と出会い，ユング研究所で心理療法を学ぶ決断を下す（第3段階）。この経過にも，実存的な意味の探求の論理が持続していることを見て取ることができる。ユング研究所での心理療法の習得は，ボッシュにとって二つの大きな意味をもった。第一に，それはボッシュの実存的な意味の探求の論理を十分に満足させるものではなかった。そのため，ボッシュは，たしかに心理療法の実践からは離れなかったものの，研究所という社会空間からは離れることになった。第二に，心理療法の習得は，それまでの自分の「助けてもらえなかった人生」に区切りをつけることになった。すなわち，ボッシュは自らを，心理療法によって他人を助ける人としてのみならず，助けを必要とする人としても主題化するようになった。これらは，新たな自己解釈の出現であるとともに，研究所という社会空間や過去の自己解釈に対する批判的，反省的な距離取りを示している（第4段階）。そして，シャーマニズムを取り入れた独自の心理療法を確立することで，実存的な意味の探求と他者へのコミットメントを両立させる，新しいハビトゥスが獲得されることになった（第5段階）。

②クリスティアーネ・オトマーの事例

クリスティアーネ・オトマー（女性）はインタビュー時点で50歳，オーガニック商品を扱う会社の経営者である。オトマーは，1950年代半ばにドイツ北部の小さな町で生まれた。父親は工場労働者，母親は専業主婦だった。オトマーには学習障害があるが，母親の助けを得ながら努力し，成績は優秀だった。教師から

はギムナジウムへの進学を勧められたが，それを断ってハウプトシューレに通い，商業の実務を学んだ。もっとも，卒業後は大学に進学することを決意する。また，教会の青年団にも所属していたが，ある時，青年団の少年たちから乱暴な扱いを受けたことをきっかけに教会との関係を断つ。ハウプトシューレを卒業後，最初はハンブルク大学で経済学を学び，次にブレーメン大学に転学して政治学を学ぶ。この頃から次第に政治に関心をもつようになり，政治活動や社会運動に参加する。また，その活動を通して知り合ったイラン人留学生と付き合い，フェミニスト・サークルにも所属した。やがて同性の恋人ができ，その恋人との静かな生活を望むようになり，政治活動から遠ざかる。大学卒業後，進むべき道を見出せずにいた時，有機農業を営む人たちと知り合い，オーガニック商品を扱う会社を共同で立ち上げ，現在に至っている。

ローゼンベルクの解釈にしたがえば（Rosenberg 2010：279ff.），オトマーの人生の出発点は，社会的上昇と経済的豊かさの志向という，労働者階級のハビトゥスによって特徴づけられる。このハビトゥスに従い，オトマーは勉強に励み，クラスで一位の成績を収め，アルバイトにも注力して多額の貯金をする。ハウプトシューレを卒業後，そのまま就職するのではなく，大学入学資格を得て大学に進学したのも，このハビトゥスの論理に従ったものである。けれども，同じ頃，教会の青年団でのトラブルをきっかけに青年団から離れ，また政治的な関心を持ち始めた頃から，新しいビオグラフィ的な意味論（Semantik）が出現する。すなわち，社会的上昇と経済的豊かさの志向という意味論に替わって，社会参加の意味論の占める割合が高まっていくのである（第1段階）。オトマーは，経済的な安定とそのための勤勉さにではなく，政治活動や社会運動に「やりがい」を見出すようになる。もっとも，そのような「やりがい」は将来的な社会的上昇や経済的な豊かさを保証してくれるものではなく，また，同性の恋人ができたことで社会参加への意欲が失われていったことなどもあり，オトマーは生活史上の危機を迎えることになる（第2段階）。その危機はまた，これまでの自己を問い直し，新しい解釈の確立を迫る機会でもあった（第3段階）。そして，大学を卒業した後，エコロジーに関心をもつ人々と出会うことで，オトマーはさらに新しいビオグラフィ的意味論を得ることになる。すなわち，エコロジカルな持続可能性を追求する会社を設立することで，幼少期以来志向していた経済的安定の意味論と，思春期に現れた社会参加の意味論を両立させる，第三の意味論を得るに至ったのである（第4段階）。そして実際に会社を設立し，第三の意味論のなかで生きることを通して，それまでとは異なる自己関係と世界関係が確立されるに至っている（第5段階）。

(2) ヴィガー

ヴィガーによれば，ハビトゥスは「社会的な立場と個人の視点，内面化された社会構造と個人の表現が，社会構造や場を再生産する実践形態に織り込まれていることを意味する概念」（Wigger 2006：102）であり，人間形成の概念と同様，「個人と社会の接点から出発し，社会構造と個人の実践を歴史的過程として媒介するもの」（Wigger 2006：103）である。その意味で，ハビトゥス論は，もっぱら主観的な人間形成過程の再構成にのみ焦点を当て，人間形成過程と社会的文脈との統合に十分成功してこなかったBOBに対する，有力な理論的提案と捉えることができる。

もっとも，ヴィガーによれば，人間形成論とハビトゥス論との間には以下のような相違点も存在する（Wigger 2006：109f.）。すなわち，人間形成論では所与の状態からの解放の可能性や主観性の根本的な変容の可能性が前提とされるのに対し，ハビトゥス論では身体に刻まれた歴史の持続性が出発点に置かれる。また，人間形成論では洞察と決断によって態度と実践を根本的に変化させ，それによって将来的にそれまでとは異質な新しいものが生じる可能性が前提とされるのに対し，ハビトゥス論では変化の社会的制限や身体化された歴史の重荷が重視される。さらに，人間形成論では理性の可能性，知識や反省性の増大，自己決定の可能性の拡大に焦点が当てられるのに対し，ハビトゥス論では社会構造が身体化されることで生じる慣習性が強調される。総じて，ハビトゥス論では社会的条件による主体の規定性に重点が置かれるのに対し，人間形成論では世界に対する自己の主体的な態勢に目が向けられる。

ただし，ヴィガーによれば，自らのハビトゥスの社会的な規定性を理解することは，自己責任の感覚から主体を解放し，社会や世界に対していかに働きかけるべきか，という人間形成上の帰結を導き出すことにつながるものでもある（Cf. Wigger 2006：116）。また，『世界の悲惨』において採られた，「ビオグラフィの語りとビオグラフィの分析的研究（中略）の両方の社会的条件を省察」（Wigger 2016：6 = 2018：142）するという観点は，BOBの方法論に重要な示唆を与えてくれるものとして評価される。これらの指摘を踏まえた上で，ヴィガーは，『世界の悲惨』のなかから「二重生活」（Bourdieu et. al. 1993：991ff. = 2020a：986ff.）と「楽園喪失」（Bourdieu et. al. 1993：951ff. = 2020a：948ff.）と題された2つのインタビューを取り上げ，人間形成論の観点から分析と検討を加えている。

①「二重生活」－ファニーの事例

ファニーはインタビュー時点（1991年）で48歳，

中学校で国語を教える女性教師である。パリで双子の娘（23歳）とともに暮らしている。ファニーの両親はともに工場労働者だった。本人は医者になりたかったが，最終的には両親の意向を受け入れて教職を選択した。学生時代（22歳の時）に3歳年下の夫と結婚。翌年，パリの中学校の教員となる。夫は郵便局に就職する。

ファニーは，やる気と熱意にあふれ，何よりも生徒のことを第一に考える教師だった。そして，自分の出世のことしか考えない管理職や守旧的な同僚，そして教職に理解のない保護者・地域社会に対して不満といらだちを感じながら教師生活を送っていた。

職業生活を最優先させるファニーを，夫は受け入れることができなかった。結婚から20年たった1985年，夫は家を出て行き，その後二人は離婚する。ファニーは，自らの高飛車な性格が夫に息の詰まる思いをさせてしまったことを反省しているが（Bourdieu et. al. 1993 : 1017 = 2020a : 1011），同時に夫の生活には無関心だったことも語っている（Bourdieu et. al. 1993 : 1021 = 2020a : 1015）。

また，夫婦の不仲は二人の娘の心に大きな傷を与えた。夫が家を出た時，二人の娘は高校生だったが，そのうちの一人はその日に高校を辞め，やがて麻薬にも手を出した。現在，ファニーと娘たちとの仲は良好だが，娘たちにつらい思いをさせたことについてファニーは，「私の人生の大，大，大失敗」（Bourdieu et. al. 1993 : 1019 = 2020a : 1013）と述べている。

ヴィガーによれば，以上のようなファニーのライフヒストリーをハビトゥス論の観点からみると，「労働者階級の環境に生まれ，教育や職業を通して社会的上昇を成し遂げた点を指摘することができ，またそれによって，地位や任務への適合性と（過剰な）同一化，彼女の分野における承認をめぐる闘争，生まれた環境に対する彼女の距離取りや抑圧や否定に対する説明を試みることができる」（Wigger 2006 : 112）。ファニーのなかには，「必要性，与えられた要求に従うこと，忍耐への意志といった，下層階級のハビトゥス」（Wigger 2006 : 113）を見出すことができる。他方，人間形成論の観点からみると，ファニーの語りにおいて注目されるのは，「あらゆる自己破壊的な影響にもかかわらず，また，職業，結婚，家庭，人生の目標に関して長い間失敗を繰り返してきたにもかかわらず，職業ないしは教職の理想と同一化することから距離を取ることをせず，それ以外の立場を拒否していること」（Wigger 2006 : 112）である。言い換えれば，ファニーは，さまざまな実存的危機にもかかわらず，「事実にもとづいた考え方，そして制度的条件や自分自身の行動の結果や機能に対する批判的検討よりも，距離を取ったり批判したりすることを許さない教職の高遠な理想に支配されている」（Wigger 2006 : 113）。ヴィガーの理解にしたがえば，ファニーの語りのなかに，危機の経験を通した変容や，反省性の増大といった意味での人間形成を見て取ることはできない。

②「楽園喪失」ーパリ近郊地区の３人の女子高生の事例

クレール，ミュリエル，ナディーヌの3人は，パリ近郊にあるヴェルレーヌ高校の生徒である。クレールは1年生，ナディーヌは3年生，ミュリエルの学年と年齢は不明である。3人はいずれも中学校の時は「優等生」だったが，高校に入ると成績が急落したという共通点をもつ。高校ではバカロレアの課程に応じて生徒が輪切りにされる[3)]。ヴェルレーヌ高校では特にその性格が強く，理系バカロレアのコースに入れない生徒は強い挫折を味わわされるのである。

クレールによれば，中学校は「小さな家族」（Bourdieu et. al. 1993 : 969 = 2020a : 964）のように感じられたが，高校にはそのような親密は雰囲気はない。入学早々教師から「みなさんが数学ができないことはわかってます。そこから抜け出すために何の努力もしないだろうということも」（Bourdieu et. al. 1993 : 971 = 2020a : 966）と言われたことにショックを受けている。ミュリエルは，高校を，「工場だよね。もう家じゃない」（Bourdieu et. al. 1993 : 967 = 2020a : 961）と表現する。また，競争主義に乗ることの無意味さも自覚しており，「自分が何をやりたいかは自分でわかってるし，ああいうプレッシャーっていうのは，うまく付き合っていかなくちゃならないし，受け流すようにもしなくちゃならないって」（Bourdieu et. al. 1993 : 973 = 2020a : 967），とも語っている。ナディーヌは生徒に対する教師の無理解について，「ほんとに，ああいう人たちからしたら，わたしなんか，将来のことなんにも考えていない，おちゃらけ者なんだっていう気がした。そんなことないのに。（中略）自分の将来がかかってるってことくらい，気がついている」（Bourdieu et. al. 1993 : 969 = 2020a : 963f.），と語る。また，自らのなかに生まれた考え方の変化について，「高1になって2か月経って，こう思った。どうせわたしはレベルの高い勉強についていくのは絶対無理だし，Cまで行くのも無理，だから考え方を変えようって」（Bourdieu et. al. 1993 : 974 = 2020a : 968f.），と語っている。

ヴィガーによれば，労働者階級の家庭に生まれたクレールの場合，「学校という進路を選択し，安定した職業の展望を求めて努力する点」（Wigger 2006 : 115）に下層階級のハビトゥスが見られる一方，中流階級の家庭に生まれたミュリエルやナディーヌの場合，「自らの嗜好や学校外の活動への関心に結びついた計画を追求する点」（Wigger 2006 : 115）に中流階級のハビトゥスが見られる。他方，人間形成論の観点から見る

と，彼女たちの語りには「教育への熱意」や「順応主義」といった中流階級や下層階級のハビトゥスとは異なるものも見て取ることができる。彼女たちは高校で挫折の経験を味わうが，その経験の省察を通して，両親の期待や学校の要求から距離を取り，自らが置かれた環境を理解した上で，今後の進路を自ら決定するに至っている。ヴィガーによれば，「自らの経験と関心を省察した結果としての，（中略）自ら人生の行程を選択するという，距離を取った批判的な自己理解と世界理解への変化のなかには，ひとつの人間形成，ひとつの人間形成形態の変容を見て取ることができる」（Wigger 2006 : 114）のである。

3. 人間形成の社会的・言説的条件とハビトゥス

前節では，ローゼンベルクとヴィガーの研究に即しながら，BOBにおけるハビトゥス論の受容について見てきた。

ローゼンベルクのアプローチは，人間形成をハビトゥスの変容として捉えようとするもので，そこでは5つの段階を経て進行する変容の過程が想定されていた。ローゼンベルクによれば，新たな生活環境のなかに身を置くことで，既習のハビトゥスと新しい生活環境との間の齟齬や，それまでの自己に対する批判的，反省的な距離取りが生まれ，やがて新しい自己関係と世界関係が構築される。このような変容の過程には，フンボルトやヘーゲルに見られる経験の弁証法の過程との共通性を容易に見て取ることができる（Cf. Koller 2012）。その意味では，ローゼンベルクが拠って立つ人間形成概念は，ハビトゥス論の援用の有無にかかわらず，ドイツ教育学の伝統を引き継ぐものと言える。

もっとも，ローゼンベルクの場合，人間形成にかかわる社会的・言説的条件と関連づける形でハビトゥスの概念が援用されているとは言い難い。たとえば，ボッシュの事例についてみると，ボッシュの人生の初期段階は実存的な意味の探求と，他者へのコミットメントという二つの実践の論理によって特徴づけられていたが，その後，生活史上の危機を経て，最終的に，上記の二つの実践の論理を両立させる，新しいハビトゥスを獲得したとされる。けれども，人生の初期段階の二つの実践の論理を生み出したハビトゥスはどのようなものか，またその論理はいかなる社会的・言説的条件のもとで形成されたのかについては，必ずしも明瞭ではない。工場経営者の父親をもつ家庭環境，カトリック教会，工場労働者たちとの交流，大学ならびに心理学専攻という組織集団，心理ケアサービスの団体への所属など，ボッシュはその人生のなかでさまざまな社会集団に身を置くが，それらの集団への所属を通してボッシュがどのようなひとつの，あるいは複数のハビトゥスを獲得したのかは明示されておらず，ボッシュの語りはもっぱら意味論の観点から分析されている。加えて，その意味論の変容の内実はいかなる意味において人間形成的と呼べるのかについても，検討されていないままである。

オトマーの事例についても同様のことが指摘できる。オトマーの人生の出発点は，社会的上昇と経済的豊かさの志向という，労働者階級のハビトゥスによって特徴づけられるとされる。その後，思春期になると，オトマーのなかに新たに社会参加の意味論が生まれ，最終的に，幼少期以来の経済的安定の意味論と思春期以降の社会参加の意味論を両立させる新しいハビトゥスが確立されたとされる。最終的に確立されたハビトゥスは，エコロジーに関心をもち，環境に優しい生活を送る人々のハビトゥスとでも呼べるものであり，そこにはたしかに当初の労働者階級のハビトゥスからの変容を指摘することができる。けれどもその変容は，やはり意味論の観点から再構成され，経済的安定と社会参加という初期の二つの意味論の両立を可能にするものという側面から説明されている。言い換えれば，ハビトゥスの変容をもたらした社会的・言説的条件が分析されるのではなく，意味論的なつながりという観点から説明されるのである。オトマーの事例では，ハビトゥスの変容を，初期の二つの意味論の止揚として筋立てることよりも，有機農業を営む人々という新たな社会集団との相互作用に着目して検討することが必要であるように思われる。また，オトマーの事例についても，労働者階級のハビトゥスからエコロジーを意識した人々のハビトゥスへという変容がいかなる意味で人間形成論的なものと呼べるのか，についても考察されていない。

ローゼンベルクのアプローチが人間形成をハビトゥスの変容として捉えようとするものであったのに対し，ヴィガーのアプローチは，インタビュイーの生活実践がハビトゥスによって規定されている様子を明らかにすると同時に，そこに人間形成としての変容が見られるかどうかを検討するものであった。ヴィガーが検討の対象として取り上げるインタビューは，『世界の悲惨』のなかでブルデューとその研究グループが実施したもので，必ずしもBOBにおいて一般的に見られるような，ある人物が自らの半生を語ったビオグラフィ・インタビューではないものの，そのような語りのなかにヴィガーは，語り手の生活実践を規定する社会的・言説的条件とともに，その条件に対して語り手がとる人間形成論的な反作用を読み取ろうとする。

その結果，ファニーの生活実践は下層階級の社会的・言説的条件によって規定されている一方，ファニーは自らの職業上の理想を実践上の基準とすることを頑なに変えようとしておらず，自己や世界に対する反省性の増大という意味での人間形成をファニーのなかに見

て取ることは難しい，という結論が導かれる。これに対し，3人の女子高生の場合には，それぞれの生活実践のなかに階級特殊的なハビトゥスを見て取ることができると同時に，自らが置かれた環境に対する批判的な距離取りや反省的な自己理解と世界理解を見て取ることができ，その意味で人間形成を認めることができる，という結論が導かれていた。

このようなヴィガーのアプローチにおいても，ハビトゥスの概念と人間形成の社会的・言説的条件の解明との関係は必ずしも明確ではない。ヴィガーが取り上げている事例では，ファニーの場合も3人の女子高生の場合も，階級のハビトゥスが彼女たちの人生の初期段階を規定していることが指摘されるが，階級以外の社会集団のハビトゥス－たとえば，ファニーの場合で言えば，教職に就いた女性，パリ近郊の在住者，離婚の経験者といった集団や空間への所属，3人の女子高生の場合で言えば，女性であることや高校生であること，パリ在住のフランス人といった集団や空間への所属からくるハビトゥスなどが考えられるだろう－が彼女たちの人間形成にとっていかなる作用を及ぼしていたのかについては詳しく分析されていない。また，ヴィガーにおいては，ハビトゥスと人間形成がある種の対立的な性格をもつものとして想定されている。すなわち，ハビトゥスはもっぱら自己に対して規定的に機能するものとして捉えられている一方，人間形成は自己関係と世界関係の主体的な調整という性格において捉えられている。ファニーの場合，自ら掲げる理念への固執がもたらす数々の困難な結果を反省し，それを踏まえて自己関係と世界関係を調整しようとする姿勢が見られないことから人間形成が認められないとされる一方，3人の女子高生の場合，高校の競争主義への適応は無意味であると判断した上で別の進路を主体的に選択していることをもって，そこに人間形成が認められるとされている。すなわち，3人の女子高生の人間形成にとっては，成績至上主義の高校の環境が社会的・言説的条件となっているということである。もっとも，そのような彼女たちの変容を描き出す上でハビトゥスの概念を用いる必要性があるのかは疑問である。人間形成の様相の解明はアイデンティティ形成の様相の再構成にとどまってはならない，という省察から取り組まれたBOBにおけるハビトゥスの概念の援用は，ローゼンベルクとヴィガーのアプローチを見る限り，なお課題を残していると言えよう。

おわりに

以上，BOBにおけるハビトゥス概念の受容について検討してきた。構造と実践の相互作用のなかで形成されるハビトゥスに着目することで，人間形成の社会的・言説的条件をより精緻に検討することが可能となり，語り手の意識に把捉された自己アイデンティティの形成へと単純化されない人間形成の様相を描き出すことが期待される。他方，BOBが自己と世界との相互作用の様相をよりよく描き出す上でハビトゥスの概念を援用する際には，以下の点に留意することが必要となるように思われる。

第一に，個人にとって意味ある所属集団をいかに規定するのか，が課題となる。ハビトゥスはある社会集団のなかで共有された構造であり，個人はその集団内での経験と学習を通してそれを習得する。BOBがハビトゥスを手がかりとして人間形成の社会的・言説的条件を解明しようとする場合には，その個人が所属する集団をどのように規定するかが課題となる。また，ひとりの個人は，先に言及したように同時に複数の社会集団に所属しており，その集団所属がその個人の生活史に対してもつ意味にも濃淡がある。その個人がどの集団所属を意味あるものと考えているのか，に着目しながら，社会的・言説的条件を解明していく必要がある。

第二に，人間形成の社会的・言説的条件とハビトゥスとの差異に留意する必要がある。ヴィガーが取り上げる3人の女子高生の場合，階級のハビトゥスに対する疑問－あるいはその一部としての高校の競争主義的な環境に対する離反－が，彼女たちの人間形成の端緒となったわけであるが，その結果彼女たちは，少なくともインタビューの時点では，明確な輪郭を備えた別の社会集団に所属することになったわけでも，別種のハビトゥスを備えることになったわけでもない。いささか図式的な整理となるが，ハビトゥスとその変容は集団所属を前提とするが，人間形成としての変容は必ずしも新しい集団への所属を必要としない。集団所属や集団移行が比較的明確である場合には，あるハビトゥスから別のハビトゥスへの変容を指摘することは容易である。これに対し，集団に対する反発や離反は人間形成の端緒となりうるものの，新たな集団所属が明確でない場合にはハビトゥスの変容について語ることは難しい。

ハビトゥス論は，主体が構造によって意図せざる形で規定されていることを指摘した点において大きな社会批判的意義を備えていた。一方，人間形成論においては，自己や世界に対する主体の反省的契機が重視される。人間形成の社会的・言説的条件の解明においてハビトゥス論を援用する場合には，このような主体の両義性を描き出しうるようなアプローチが求められると言えよう。

註

(1) この意味において，ハビトゥスはチョムスキーの唱えた生成文法に喩えられる（Bourdieu 1967：152ff.=1987：137ff.）。ただし，ハビトゥスは社会的経験と学

習を通して習得されるものであるのに対し生成文法は生得的であると考えられている点，またチョムスキーにおいては規則と規範が明確に区別されていない点などの相違も指摘される（Bourdieu 1980：64f. =1988：58）

(2) たとえば，『世界の悲惨』の日本語訳第Ⅰ巻の冒頭に収められたインタビュー「『世界の悲惨』とは何か」（13頁以下）や，Wigger 2006（107f.）を参照。

(3) フランスの高校のバカロレア（高校卒業・大学入学資格試験）にはいくつかの種類と系列（課程）がある（『世界の悲惨』日本語訳第Ⅲ巻，1518-1519頁参照）。1993年時点では，伝統的な「普通バカロレア」，1968年に創設された「技術バカロレア」，1985年に創設された「職業バカロレア」の3種類に区別される。また，「普通バカロレア」はA系列（哲学・文学），B系列（経済・社会），C系列（数学・物理），D系列（数学・自然科学），E系列（数学・技術）に，「技術バカロレア」はF系列（工業技術），G系列（行政・商業），H系列（情報処理）に，それぞれ下位区分される。表向きは系列間に優劣はないとされるが，実際には歴然とした格差が存在する。すなわち，「普通バカロレア」，「技術バカロレア」，「職業バカロレア」の順に格が高く，「普通バカロレア」内部では理系（特にC系列）の格がもっとも高い。

文献

Bourdieu, Pierre（1967）: Postface. In: Panofsky, Erwin: Architecture gothique et pensée scolastique. Paris（Minuit）, pp.133-167. =（1987）「生成文法としてのハビトゥス：パノフスキーのイコノロジー論をめぐって」，三好信子訳，『actes』2，日本エディタースクール出版部，67-83頁。

Bourdieu, Pierre（1979）: La Distinction. Critique sociale du jugement. Paris（Minuit）. =（2020）『ディスタンクシオン：社会的判断力批判』Ⅰ・Ⅱ，普及版，石井洋二郎訳，藤原書店。

Bourdieu, Pierre（1980）: Le Sens pratique. Paris（Minuit）. =『実践感覚』1（1988）・2（1990），今村仁司・港道隆訳，みすず書房。

Bourdieu, Pierre（1986）: L'illusion biographique. In: Actes de la recherche en sciences sociales. Vol. 62-63, pp.69-72. =（2005）「伝記的幻想」，小林多寿子訳，『日本女子大学紀要 人間社会学部』16，11-16頁。

Bourdieu, Pierre（1997）: Méditations pascaliennes. Paris（Seuil）. =（2009）『パスカル的省察』，加藤晴久訳，藤原書店。

Bourdieu, Pierre et. al.（1993）: La misère du monde. Paris（Seuil）. =ブルデュー，ピエールほか『世界の悲惨』Ⅰ（2019），Ⅱ（2020a），Ⅲ（2020b），荒井文雄・櫻本陽一監訳，藤原書店。

Koller, Hans-Christoph（2012）: Bildung anders denken. Einführung in die Theorie transformatorischer Bildungsprozess. Stuttgart（Kohlhammer）.

Koller, Hans-Christoph（2016）: Bildung und Biografie. Probleme und Perspektiven bildungstheoretisch orientierter Biografieforschung. In: Zeitschrift für Pädagogik, 62（2）, S.172-184.

Rosenberg, Florian von（2010）: Bildung und das Problem der Weltvergessenheit. Überlegungen zu einer empirisch fundierten Bildungstheorie im Anschluss an Pierre Bourdieu. In: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik, 86, S.571-586.

Rosenberg, Florian von（2011）: Bildung als Habitustransformation. Empirische Rekonstruktionen biographischer Bildungsprozesse zwischen Habitus und Feld. Bielefeld（transcript）.

Wigger, Lothar（2004）: Bildungstheorie und Bildungsforschung in der Gegenwart. Versuch einer Lagebeschreibung. In: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik, 80, S.478-493.

Wigger, Lothar（2006）: Habitus und Bildung. Einige Überlegungen zum Zusammenhang von Habitusformationen und Bildungsprozessen. In: Friebertshäuser, Barbara / Rieger-Ladich, Markus / Wigger, Lothar（Hrsg.）: Reflexive Erziehungswissenschaft. Forschungsperspektiven im Anschluss an Pierre Bourdieu Wiesbaden（VS Verlag）, S.101-118.

Wigger, Lothar（2016）: Pierre Bourdieu's "La misère du monde" and its Importance in Educational Research. Manuscript of a lecture on 09. 11. 2016 at the Osaka University. = ヴィガー，ローター（2018）「ピエール・ブルデューの『世界の悲惨（La misère du monde）』と教育学研究におけるその重要性」，上林梓ほか訳，『大阪大学教育学年報』23，137-149頁。

小林多寿子（2005）：「ピエール・ブルデュー『伝記的幻想』とライフストーリー論」，『日本女子大学紀要 人間社会学部』16，17-26頁。

シャンパーニュ，パトリック（1997）「社会学的対話についての考察：P.ブルデュー『世界の悲惨』をめぐって」杉山光信訳，『思想』872，86-101頁。

付記

本研究の実施にあたり，JSPS科研費JP 23K02055の助成を受けた。

（2023年9月22日受理）